

宮下遼



ここに訳出したのは小説『タラートとフィトナトの恋』の冒頭部分である。一八七二年から七三年にかけて新聞連載され、七五年に

出版された本作は、文学史一般において史上最初のトルコ語（あるいはオスマン語）小説と見なされている。

この冒頭部分でタラートの母サリ八婦人とアイシエが交わす結婚を巡る議論は、つまるところ恋愛と結婚において子の心を尊重すべきか、それとも判断能力のない子供の幸せを思つて親が相手を選んでやるべきかという、新旧の恋愛・結婚観の対立を炙り出すが、このあと物語は彼女たちの投げかけた問に答える形で進んでいく。家を出た少壮の官人タラートは、つい先日一目ぼれをした貧しい良家の娘フィトナトと知り合おうと恋の手管を弄し、物語は微笑ましい恋愛劇の様相を呈するのだが、それもつかの

間、フィトナトが義父ハジュババによつて富裕な紳士アリ・ベイに無理やり嫁がされてしまうとい転して陰鬱な悲劇へと変調する。

善良な中年紳士であるアリ・ベイは、美しいフィトナトにかつての恋人ゼキエの面影を重ねたちまち恋するのだが、娘の方は出会つた瞬間からこの紳士に父に対するような安らぎを覚えるものの恋するには至らない。察しがつくように、フィトナトはアリ・ベイとゼキエの妻の娘なのだ。とりあえず手伝いとしてアリ・ベイの屋敷に住まふこととなつたフィトナトはやがて、心労から床に臥せ、ついには自刃してしまふ。これと同じとき、フィトナトがいつも提げていた護符をたまたま目にしたアリ・ベイは、フィトナトが生き別れた娘であることを知る。大慌てでフィトナトの居室に飛び込むものの、娘はすでにこと切れた後であつた。妻の娘に恋をしたという忌まわしい事実には耐えかねたアリ・ベイは発狂して半年を待たずに死亡し、恋人の死を知つたタラートもまた、後を追うように神のもとに召される。しまいに母サリ八もまた号泣の末にこの世に別れを告げたことが手短かに語られ、物語の幕は閉じる。

「あらゆる者の内に秘められた力」と作中で説かれた恋心に従つた結果として生まれた悲劇は、同時代のイスタンブルを舞台とし、なおかつ妻の父が娘に恋情を抱くという禁忌を描いた

ことも相俟つて人気を博し、新聞連載小説が単行本化される最初の例となつた。

* * *

そもそも、十九世紀初頭までペルシア文学の伝統を踏襲して創作物語は韻文で記すのを習いとしたトルコ文学にあつて、改革期（一八三九年から一八七六年）までの散文の物語といえは、影絵芝居や講談、あるいは小断のような分量的に短い作品に限られていた。一八五〇年代末より、のちに新オスマン人を称する改革派官人たちによつて新聞が発刊され、紙上で西欧の詩、小説の翻訳がはじまると徐々に状況が変わりはじめた。まず、国産小説に先んじる形で戯作の発表が行われる。新オスマン人イブラヒム・シナースイー『詩人の婚礼 (Sair Evlenmesi)』（一八六〇年）を嚆矢として、会話主体であるため庶民にも理解されやすい戯作という創作スタイルは急速に定着し、のちにはナムク・ケマル『祖国あるいはスイリストレ (Vatan yahut Silistre)』（一八七二年）のような愛国的戯作の流行にもつながる。こうした翻訳・翻案や戯作の発展を背景として、一八七〇年代に入ると本作やアフメト・ミドハト『フェラートゥン・ベイとラクム・エフェンディ (Felatun Bey ile Rakim Efendi)』（一八七五年）のような小説

(romani) が上梓されることとなるのである。

作者シエムセッティン・サーミー・フラシリ (Semsetin Sami Frąşiri, オスマン語綴りではシエムセッディーン) は一八五〇年、アルバニアのペルメディに生まれたアルバニア系オスマン人である。その業績は、(オスマン語ではなく) トルコ語の名を冠した最初の辞書であり口語トルコ語を多く所載した『トルコ語辞典』(一九〇一年) を筆頭に『フランス語辞典』、『アラビア語辞典』のような辞典、『ロビンソン・クルーソー』、『ああ、無情』などの試訳、そして本作のような創作小説と多岐にわたる。彼の才能はスルタン・アブデュルハミト二世にも高く買われ、専制政治と粛清の象徴として「ユルドゥズ法廷」と綽名されたユルドゥズ宮殿内に伺候する上級の書記官に取り立てられている。いかにも世紀末オスマン帝国の改革派官人らしい如才のないキャリアと手広い業績は、いずれもオスマン帝国、そしてトルコ共和国における言文一致の進展に大いに寄与したといまなお評価される。なお、アルバニアではサーミーをアルバニア民族主義の唱道者として評価しているそうだが、本人の著作を見る限りは穏健なオスマン主義者であり、アルバニア以外の研究者の多くはこれを否定する。おそらく、専政期末期のアルバニア系官人の中でも知名度の高かったサーミーが、一九〇四年の没後間もなくからア

ルバニア民族主義をうたう論者の作者として借名された結果なのであろう。

さて、『タラートとフィットナトの恋』には、物語そのもののみならず技術的にも数多くの作者の創意と工夫が凝らされている。ここでは音写表記、セリフ、プロットの三点について瞥見しておく。

まず音写表記について。『タラートとフィットナトの恋』では、会話を主体としつつ、その間を語り手である作者の簡潔かつ解説的な地の文がつなぐという戯作の発展形というべき構成をとっている。アラビア文字綴りの確立していなかった口語トルコ語を音写するため、サーミーはシナースイーやナムク・ケマルの戯作における綴りを参考にしつつ、ときに正しいアラビア語の綴りを擲ってまで実際のトルコ語における発音を重視するという音写重視主義を採用している。サーミーは本書の掉尾で、悲劇の余韻に浸る読者たちに水を差すかのように「本書は真のトルコ語に由来する語彙を、よく知られている綴りをさほど遵守せずに、ある程度その発音に応じて書いたこと、そしてまたアラビア語の語彙についても、私はその正しい綴りはもちろん知っているが、実際の話者の口から出るところに依拠して書いたことを付記しておく」と述べており、本作の狙いが言文一致の推進にあったことは明らかである。彼の試み

は、一九一〇年代にはじまる新言語運動 (Yeni Lisan Hareketi) へと繋がる「国語」としてのトルコ語の整備への重要な下地となった。

次にセリフ回しについても見ておこう。冒頭に登場するアラブ人の婆やアイシエに注目したい。幼いころに北アフリカから連れてこられたというこの愛情深い善良な女性のセリフは、実のところトルコ語としてもオスマン語としても誤りだらけの綴りで記されている。彼女のセリフはすべて「見ました」(gördüm) を「見ますた」(gurdum)、「ご婦人」(hanım) を「ごすずん」(hanim) のように、イスタンブルでアラブ訛りと見なされたトルコ語口語の音写によって書かれているのだ。こうした非トルコ語母語話者のトルコ語発話における訛りの模倣と、その聞き違いを笑いの種として進む滑稽譚は、帝都都市社会の民衆芸能の花形であった影絵芝居においてもっとも重要な演目となってもいた。サーミーは民衆にとって文語オスマン語などよりもよほどなじみのある訛言葉を作品の劈頭から用いることで、読者の共感を手繰り寄せようとしたことが見て取れる。その一方で、影絵芝居であれば嘲弄的な笑いの対象として消費されるべきアラブの婆やアイシエは、人買いにさらわれた悲しい過去を明かし、それでいて恨むでもなくサリハとタラート母子を慮る血肉の通った人間としても描かれている点には、留意が必要だ

ろう。

本作のプロットもまた民衆にとってなじみの深い古典から取られている。『ライラーとマジユヌーン』である。アラブの恋愛物語『ライラーとマジユヌーン』はイスラーム文化圏の津々浦々で愛唱されて人々の涙を誘い、恋愛についての教訓を伝えたことはよく知られる。イスタンブルにおいてもそれは同様で、オスマン帝国においてはじめてムスリムによって演じられた欧風演劇が『ライラーとマジユヌーン』であったことを思い起こせば（ただしハッピーエンドで終わるヴァリアント）この物語がいかに人口に膾炙したのが窺える。

実のところ一八五〇年代から散文の小説「的な書き物は各新聞紙上などで散発的に発表され、あるいは出版されたこともあり、史上最初のトルコ語小説を巡ってはアルメニア系オスマン人ヴァルタン・パシヤの作でキリスト教の宗教訓話の小説『神愛物語 (Akabe Hikayesi)』（一八五〇年）とする研究者もいれば、本作の第三部冒頭のような作者による啓蒙的主張の部分を廃し物語に集中したミッドハト『フェラートゥン・ベイとラクム・エフェンディ』とする主張もある。とくに後者の説は最近になって支持を拡大しつつある異説である。それでもなお『タラートとフィットナトの恋』が最初のトルコ語小説として評価され続けるのは、民衆に

とってよく知られた古典の大筋に依拠しながら影絵芝居における言語表現をも援用して散文創作物語に投じた作者サーミーが、珈琲店や影絵芝居の本場シエフザーデバシユ地区にこの時代にお目見えした読書クラブ等において読み上げられることを想定しつつ、明確に大衆読者を意識した最初の作家であったからであろう。本作は、実直かつ有能であった官人サーミーの良心的なたくらみの数々によって、まずは史上初のトルコ語小説と呼ぶべき実質を備えている。